

目的 高度経済成長又それに続く経済抑制に伴い、生活は様々な変容を示し、数多くの問題を投げかけている。今日、既往の学門の枠に捉われず、生活を総体的に扱ひ得る学際的研究が必要とされている。本来そうした研究の担い手となるべき家政学は、各個別領域においては著しい展開を示したにもかかわらず、総合化への視座が不明確になっていると思われる。

本研究の目的は、そうした家政学の現状を正しく認識し、今後の家政学の方向を模索することにある。今回はその第一歩として、今日までの家政学の研究対象を整理検討し、考察を行なうこととする。

方法 戦後の原論関係書40冊、雑誌掲載論文14篇を対象に、まず家政学の研究対象の定義に着目しその内容の分析と変遷について整理を行った。又、各著者の特徴的な捉え方を考察し、類型分類を試みた。

結果 家政学原論における研究対象は次の3つに大別された。

1. 家庭又は家庭生活に限定しているもの

2. 社会との関連の中で家庭を捉え乍らも、家庭及び家庭生活に限定しているもの

3. 社会の構成単位としての家庭を中心に、これに関連する人間生活も包含するもの

又、研究対象の経年的変化を考察すると、初期は主として社会との関連性に対する認識が希薄なものが多かったが、家庭の機能の外在化に伴い対象をより広義なものとする傾向がみられた。